



「分析化学の発展がもたらした文化財の新しい世界-色といろいろ-」の開催

2023年3月4日に東京文化財研究所(以下、東文研と表記)早川泰弘副所長・奈良文化財研究所高妻洋成副所長の退任記念シンポジウムが東文研保存科学研究センター・奈文研埋蔵文化財センターの主催、ならびに日鉄テクノロジー株式会社との共催で開催されました。東文研をメイン会場として、奈文研のサテライト会場とYouTubeによる同時配信もおこない、あわせて約290名の方々にご参加いただきました。シンポジウムは分析化学の発展がもたらした文化財の新しい世界を、その「色」という切り口から紐解く趣旨で企画され、両副所長による基調講演にくわえて、文化財研究の最前線で活躍する7名の研究者の方々にご講演をいただきました。

早川副所長には「日本絵画における白色顔料の変遷」というタイトルでご講演いただきました。この講演はこれまでに取り組まれた膨大な調査成果にもとづくもので、古代から普遍的に使われてきた白色顔料についての総論的な内容でした。白色顔料が鉛白から胡粉に変遷することや、さらに時代が下ると再び鉛白も併用されるようになり、そこには技法と



会場の様子

の相性や地域性がみられることが科学分析にもとづき示されていました。文化財の新たな歴史が科学分析によって紐解かれることを示す象徴的な講演でした。

また、高妻副所長の講演は「領域を越えて」というタイトルでした。講演は考古資料・遺跡の保存科学、高松塚古墳の石室解体とその後の壁画の調査、文化財防災の取り組み等、非常に多岐にわたるものでした。講演の終わりには自然科学、人文科学にくわえて新たに社会科学の知見を導入する文化財科学の新たな展望についても触れられていました。

その他の講演も文化財の発色メカニズム、色の数値化による文化財の劣化の有無に関するモニタリング等、色という切り口で大変幅広い内容でご講演いただきました。また、講演後には講演者によるパネルディスカッションもおこなわれました。

東文研・奈文研・日鉄テクノロジー株式会社からなるスタッフの連携によりシンポジウムは盛会となりました。両副所長が育まれた三者の緊密な関係性により、組織を超えた連携が後進の私たちの代において一層進んでいることを感じ、改めて両副所長が残された功績が胸に刻まれた一日でした。なお、シンポジウムの模様は東文研のYouTubeチャンネルに公開される予定です。ぜひご覧ください。

(埋蔵文化財センター 柳田 明進)



パネルディスカッションの様子